

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四糸金吾殿御返事

ほうろんこころえ こと

（法論心得の事）

新版
1548
〜
1549

しじようきんごどのごへんじ ほうろんごころえ こと

四条金吾殿御返事（法論心得の事）

けんじがんねん

がつ にち

さい

しじようきんご

建治元年（75）7月22日

54歳（四条金吾）

おんつか

よろこ い

そうろう

こうじごじゆう

がもく

わざと御使い、喜び入って候。また柑子五十・鵝目

ごかんもん

た そうら お

おのおのごくよう うんぬん

五貫文、給び候い畢わんぬ。各々御供養と云々。

おんふみ

なか い

い じゆうろくにち

そう

よ あ

また御文の中に云わく「去ぬる十六日にある僧と寄り合

そうろうとき

しよほうじつそう

ほうもん

もう

あ

うんぬん

って候時、諸法実相の法門を申し合いたり」と云々。

こんきよう

しゆつせ

ほんかい

いつさいしゆじようかいじようぶつどう

こんげん

もう

今経は出世の本懐、一切衆生皆成仏道の根元と申すも、

しよほうじつそう

しじ

ほか

まった

ただこの諸法実相の四字より外は全くなきなり。されば、

でんぎようだいし

ばんり

はとう

凌

たま

そうでん

伝教大師は万里の波濤をしのぎ給いて相伝します、こ

もん　いづくばんりよう　いちごん
の文なり。一句万了の一言とは、これなり。

とうせいてんだいしゅう　かいえ　ほうもん　もう　きようもん　あ
当世天台宗の開会の法門を申すも、この経文を悪しく

こころえ　じゃぎ　い　い　そうろう　きよう　たも
意得て邪義を云い出だし候ぞ。ただこの経を持つて、

なんみようほうれんげきよう　とな　しょうじき　ほうべん　す　むじよう
南無妙法蓮華経と唱えて、「正直に方便を捨てて、ただ無上

どう　と　しん　しよほうじつそう　かいえ　ほうもん　もう
道を説くのみ」と信ずるを、諸法実相の開会の法門とは申す

ゆえ　しゃかぶつ　たほうによらい　じつぼうさんぜ　しよぶつ　しようにん
なり。その故は、釈迦仏・多宝如来・十方三世の諸仏を証人

たてまつ　そうろう　あいかま　こころえ　たまた
とし奉り候なり。相構えて、かくのごとく心得させ給い

しよほうじつそう　よつ　もんじ　ときどき　味　たも
て、諸法実相の四つの文字を時々あじわえ給うべし。

ろうやく　どく　雑　潮　なか　かわ
良薬に毒をまじうることにあるべきか。うしおの中より河

の水を取り出だすことありや。月つきは夜よに出で、日ひは昼出で給ひるい たも

ことあらそ

のち

こころえたま

う。この事諍うべきか。これより後には、かように意得給

ごもんどう

こまごま

ろんなん

たも

いて御問答あるべし。ただし、細々は論難し給うべからず。

もう

某

し

そうろうにちれんぼう

ごほうもんそうら

なおも申さば、「それがしの師にて候 日蓮房に御法門候

打 わら

う

かえ

う

かえ

おお

たも

そうろう

え」とうち咲つて、打ち返し打ち返し仰せ給うべく候。

けんじがんねんきといしちがつにじゅうににち

にちれん

かおう

建治元年乙亥七月二十二日

日蓮

花押

しじょうなかつかさのさぶろうざえもんのじょうどのごへんじ

四条中務三郎左衛門尉殿御返事

ほうもん

か

ごくよう

ころろざし

もう

そうろう

法門を書きつるあいだ、御供養の志は申さず候。

あ

がた

あ

がた

くわ

懇

もう

有り難し、有り難し。委しくは、これよりねんごろに申す

べく
候。
そうろう